



Title	西陣絰の盛衰：細分化された分業化の行く先
Author(s)	白須, 美紀
Citation	デザイン理論. 2026, 87, p. 104-105
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103732
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

西陣絣の盛衰

— 細分化された分業化の行く先

白須 美紀 京都女子大学研修員

京都西陣で作られる絣織物

久留米絣や小千谷縮といった藍染の木綿や麻の絣織物は江戸末期に日本各地で誕生し、明治から昭和にかけて庶民の着物として浸透した。絣を紹介する書籍もこれらの木綿や麻の絣が掲載されていることが多い。その一方で日本には、大島紬、結城紬、琉球絣、銘仙といった絹織物の絣も存在する。550 年以上の歴史を持つ京都の西陣でも絹織物の絣が作られており伝統的工芸品西陣織の技法として認定されている。そんな西陣で作られている絣織物やその技法を「西陣絣」という。

西陣の織物はあらかじめ染めた色糸や金銀糸を緯糸に使う模様を織り出していくが、使用する 1 本 1 本の糸は単色である。しかし絣は初めから糸そのものを多色に染め分けておき模様をつくる技法だ。西陣絣の場合は経糸絣が中心のため、染め分けたたくさんの経糸を並べ替えたりずらしたりして織る前に布の模様を作りあげる。

現在、西陣織は金銀や色糸を使用した豪華な帯のイメージが強く絣織物の産地である印象はほとんどない。木綿絣に比べてあまり注目されない絹の絣であるうえ、西陣織の一技法としても広く認知されない状態のまま、西陣絣は今日まで受け継がれてきた。

絣の歴史

絣は世界中で作られてきた歴史ある織物だ。発祥の地とされるインドでは、7~8 世紀頃から高度な絣織物が作られていたと考えられている。

だが日本でいつから絣が作られていたかは明らかにしていない。現存する絣の技法が使われた

着物は室町時代以降のものになる。

室町時代の絣織物では「締切絣」が見つっている。経糸を織り幅いっぱいまで括って防染し、色を染め分ける技法だ。京都では祇園祭の芦刈山伝来の「綾地締切蝶牡丹文片身替小袖（重要文化財）」が、1964（昭和 39）年に芦刈山収蔵庫にある長持から見つかった。1974（昭和 49）年に修理したところ左襟裏の麻地に「天正十七年己丑年六月吉日」の墨書が発見された。

また江戸時代に入ってからには締切絣に加えて、武士が袴の下に着用した「熨斗目」にも絣技法が使われており「熨斗目絣」と呼ばれた。京都で言えば創業 300 年を超える着物メーカー（株）矢代仁に江戸末期の絣織物の見本帳が伝わっている。表紙には「御殿絣」と書かれており、公家や大名家の注文を受けるために作られたもので、御殿女中たちの着物の裂見本だと考えられている。前述したように江戸末期には木綿や麻に藍染した庶民の絣も日本各地で生まれているが、西陣の絹の絣は、芦刈山の御神宝や矢代仁の見本帳などからも、締切絣や熨斗目など絹絣の歴史を受け継いでいると考えられている。

その後西陣の絣は、お召着物の一種として大正時代から昭和初期にかけて一般に広まるようになった。最も多く生産されたのは、昭和 30 年代に起きた「絣お召」ブームの頃であると当時を知る職人たちは口を揃える。西陣絣職人徳永弘氏の工房には昭和 30 年代の絣お召の見本裂が残っているが、矢絣などの定番柄にも色々なバリエーションがあり、カラフルで模様も多彩である。

その後いわゆる「着物離れ」によって生産量は落ちてしまったが、令和の現代でも着物や帯、雨用コートなどが作られている。また文化財の復刻や、能衣装、社寺の幡などにも欠かせない技術として活用されている。

西陣絣の衰退と要因

西陣絣製造では、デザイン設計以外に大きく2つの作業がある。1つは色を染め分けるための「防染」、もう1つが経糸を手で並び変えたり梯子とよばれる道具でずらしたりして模様を作る「柄作り」だ。西陣織は分業化されており、防染後の糸染は染めの職人が行い、柄作りを終えた経糸は織の職人が製織する。絣職人の仕事は経糸の絣模様を作り織機に設置するちきりに巻き上げたところで終わるため、仕上がりの布を見ることはほとんどない。

西陣絣は現在、後継者不足が大きな課題となっている。2025年現在、西陣絣加工業協同組合所属の職人が7名いるが、うち40代が2名、70代が1名、80代が4名で、実際に生業として製造しているのは40代の葛西郁子氏のみである。

西陣絣加工業者数の推移は、西陣絣加工業協同組合の総会資料で見ることができる。第1回総会が開催された昭和52年から、組合を解散し任意団体に戻った4年後にあたる平成23年までの37年間の組合員数が記録されているからだ。西陣絣の最盛期は昭和30年代だったが組合設立は昭和50年代であるため、衰退がすでに始まってからの記録となる。この資料では組合設立当初は45名だった組合員は平成23年には9名になっており、37年の間減少を続けていた。歴史上、組合員が増えたのは記録が途絶えた4年後の平成27年のことである。それは、現在絣加工を生業にしている唯一の職人、葛西郁子氏が組合入りをした年であった。

西陣絣の衰退の理由はいくつかあるが、まずはライフスタイルの変化による着物離れがあげられるだろう。着物は礼装へと用途が変わり、普段着着物の柄ゆきである絣の需要が減ってしまった。

またプリントなど別の技法で絣の模様を再現することができるため、すべて手仕事である西陣絣よりもコストパフォーマンスのよい製造方法に代替えされてしまう。さらに、西陣織の分業化構造も大きな要因だ。絣職人は関連工としてメーカーの立場である機屋から依頼を受けて仕事をしており自ら企画や営業をするわけではないため、現状を突破するような挑戦はしづらい。現在唯一絣加工業を生業にしている葛西氏の仕事内容を見ると、従来の西陣の仕事以外に、小千谷ちぢみなど他産地の絣加工や、洋装の仕事も手掛けている。だがこれらも葛西氏に直接依頼された仕事ではなく、布メーカー経由の受注であることは従来と変わらない。

職人の活動で、現状を変える

近年工芸界では、個人の活動によって注目を浴び仕事を発展させている職人を散見するようになった。葛西氏も2019年からイッセイミヤケの生地を何度か手がけており、葛西氏が絣加工した布で作られた衣装がランウェイで発表されている。イッセイミヤケの特集した雑誌では、葛西氏自らが絣加工に携わった製品を着てモデルになった。このように職人が注目を浴びることで西陣絣に注目が集まることもある。また和装業界も作り手にスポットを当てて差別化を図る店が増えており、葛西氏の名前入りの着物や帯を小売店で見かける。これまでは職人の名前が一般消費者から認知されることはありえなかったが、職人の名前で製品が売れるということも驚くことではなくなってきている。このように職人個人のファンを作ることは、西陣絣自体の認知を高め、職人のチャンスも増え、ひいては技術を守ることにつながるだろう。しかし普段コツコツと仕事しなければならない職人が注目を浴びるために行動するのはなかなか難しい。前述したようなクライアントによるブランディングはもちろん、研究者やメディアなど他業種の協力も欠かすことはできない。その仕組みづくりには、まだ工夫と研究の余地があると考えられる。